

川端康成全集 第十二卷

川端康成全集

第十二卷

古都・片腕・落花流水

新潮社

川端康成全集第十二卷

都 腕
古 片
落花流水



昭和四十五年五月十日 發行
昭和四十九年六月三十日 三刷

定價 二千三百圓

著 者 川 端 康 成

發行者 佐 藤 亮 一

印刷者 多 田 基

印刷所 多田印刷株式會社

原色版 半七寫眞工業株式會社

製本所 新宿・加藤製本所

東京都新宿區矢來町七一

發行所 株式會社 新潮社

電話東京〇三二六〇一一二一
一六二 振替東京八〇八番

龜丁本、落丁本は本社又はお買求め
の書店にてお取替へいたします。

第十二卷

目次

古 都……………七

片 腕……………一九七

掌 の 小 説……………二二五

秋の雨 三七 手紙 三三 隣人 三四 木の上 三六

乗馬服 三四 かさざぎ 三四 不死 二六 月下美人 二五

地 三六 白馬 二二 雪 二五

落 花 流 水……………二六九

美智子妃殿下……………三二一

岸恵子さんの婚禮……………三三一

自慢十話……………三五一

「淺草紅團」について……………三七五

「雪國」の旅……………三八五

週間日記……………三九一

宿 驛……………三九九

パ
リ
郷
愁……………四〇五

パリ安息……………四一三

ブラジルペン大會……………四二一

字のことなど……………四二九

美しい地圖……………四三五

古都・片腕・落花流水

古

都

春の花

もみちの古木の幹に、すみれの花がひらいたのを、千重子は見つけた。

「ああ、今年も咲いた。」と、千重子は春のやさしさに出會つた。

そのもみちは、町なかの狭い庭にしては、ほんたうに大木であつて、幹は千重子の腰まはりよりも太い。もつとも、古びてあらう膚が、青くこけむしてゐる幹を、千重子の初々しいからだにくらべられるものではないが……。

もみちの幹は、千重子の腰ほどの高さのところ、少し右によぢれ、千重子の頭より高いところで、右に大きく曲つてゐる。曲つてから枝々が出てひろがり、庭を領してゐる。長い枝のさきは重みで、やや垂れてゐる。

大きく曲る少し下のあたり、幹に小さいくぼみが二つあるらしく、そのくぼみそれぞれに、すみれが生えてゐるのだ。そして春ごとに花をつけるのだ。千重子がものごころつくころから、この樹上二株のすみれはあつた。

上のすみれと下のすみれとは、一尺ほど離れてゐる。年ごろになつた千重子は、

「上のすみれと下のすみれとは、會ふことがあるのかしら。おたがひに知つてゐるのかしら。」と、思つてみたりする。すみれ花が「會ふ」とか「知る」とかは、どういふことなのか。

花は三つ、多くて五輪、毎春まあそれくらゐだつた。それにしても、木の上の小さいくぼみで、毎

春、芽を出して、花をつける。千重子は廊下からながめたり、幹の根もとから見上げたりして、樹上のすみれの「生命」に打たれる時もある。『孤獨』がしみて来る時もある。

「こんなところに生れて、生きつづけてゆく……。」

店へ来る客たちは、もみぢのみごとさをほめても、それにすみれ花の咲いてゐるのを氣がつく人はほとんどない。老いの力こぶのはいつた太い幹が、青ごけを高くまでつけて、なほ威嚴と雅致とを加へてゐる。それに宿るささやかなすみれなど目につかぬのだ。

しかし蝶は知つてゐる。千重子がすみれの花をみつけた時、庭を低く飛んでゐた、小さく白い蝶のむれが、もみぢの幹からすみれ花の近くに舞つて來た。もみぢもやや赤く小さい若芽をひらかうとするところで、その蝶たちの舞の白はあざやかだつた。二株のすみれの葉と花も、もみぢの幹の新しい青色のこけに、ほのかな影をうつしてゐた。

花ぐもりぎみの、やはらかい春の日であつた。

白い蝶たちが舞ひ去つたあとまで、千重子は廊下に坐つて、もみぢの幹の上のすみれを見てゐた。

「今年も、そんなところで、よう咲いとおくれやしたな。」と、ささやきかけたやうである。

すみれの花の下あたり、もみぢの根かたには、古い燈籠が立つてゐる。燈籠の足にきざまれた立像を、千重子の父はキリストだと、いつか千重子に教へたことがあつた。

「マリアさまやおへんの？」と、その時、千重子は、「北野の天神さんに、よう似た大きいのがありましたえ。」

「これはキリストやさうな。」と、父はあつさり言つた。「赤子抱いてやはらへん。」

「あ、ほんまに……。」と、千重子はうなづいたものだつた。そして、たづねた。「うちの御先祖に、

キリシタンがおいやしたんですか。」

「いいや、この燈籠は、庭師が石屋が持つて来て、すゑたんやろ。そないめづらしいといふ燈籠やない。」

このキリシタン燈籠は、むかし、キリシタン禁制のころにつくられたものであらう。質のあらくもろい石なので、浮き彫りの像も、なん百年かの風雨に朽ちこぼれて、ただ頭とからだ足の形が、それと見られるだけである。もともと單純な彫りだつたのだらう。そでは長くてすそまでとどきさうである。合掌してゐるらしいが、腕のあたりがややふくらんでゐるだけで、形はわからない。しかし、佛や地藏の像とは感じがちがふ。

むかしは信仰のしるしであつたか、むかしの異國風の飾りであつたかの、キリシタン燈籠が、今はただその古さびのために、千重子の店の庭でも、もみぢの古木の根かたにおかれてゐる。目にとめる客があると、父は「キリスト像」だと言ふ。でも、商用の客には、大もみぢのかげの、くすんだ燈籠など氣のつく人はまれだつた。氣がついたところで、庭に燈籠の一つや二つはあたりまへで、よく見もしない。

千重子は樹上のすみれ花を見つけた目を落して、キリストをながめてゐた。千重子はミツシヨンの學校ではなかつたが、英語に親しむために、教會に出入りをして、新舊の聖書も讀んでゐた。しかし、この古さびた燈籠に、花をささげたり、らふそくをともしたりするのは、ふさはしくないやうである。燈籠のどこにも十字架は彫られてゐなかつた。

都
キリスト像の上のすみれの花は、これは、マリヤの心のやうに思はれもした。千重子はキリシタン燈籠から、またすみれ花に目をあげた。——ふと、そして、古丹波の壺に飼育してゐる鈴蟲が思ひ出された。

古

鈴蟲を千重子が飼ひはじめたのは、もみぢの古木にすみれの花を見つけたよりも、よほど新しい。四五年このかたのことである。高等學校の友だちの居間で、鳴きしきるのを聞いて、いく匹かをもらつて來てからである。

「壺のなかで、かはいさうやわ。」と、千重子は言つたが、籠で飼つて、ただ死なせるよりもいいと、友だちは答へたものだ。たくさん飼つておいて、卵を賣る寺さへあるといふ。同好者も少くないやうだつた。

千重子の鈴蟲も、今ではふえて、古丹波の壺二つになつてゐる。毎年きまつて、七月の一日ごろに卵からかへつて、八月のなかごろに鳴きはじめる。

しかし、狭く暗い壺のなかで、生れ、鳴き、卵をうみつけ、死んでゆく。それでも、種の保存はするから、なるほど、籠で飼ふ、短いのちの一代きりよりいいかもしれないが、まったく壺中の一生であり、壺中が天地である。

「壺中の天地」といふ話が、大むかしの中國にあることは、千重子も知つてゐる。その壺中には、金殿玉樓があり、美酒や山海の珍味にみちてゐた。壺中はつまり、俗世間をはなれた、別世界、仙境であつた。數多い仙人傳説の一つである。

しかし、鈴蟲たちは、もちろん、浮世をいとうて、壺のなかにはいつたわけではない。壺のなかにあるとも、おそらくは知らないであらう。そして、生をいとなんでゆく。

鈴蟲で千重子をもつともおどろかせたのは、時に、よそからの雄たちを壺に入れてやらないと、一つの壺の鈴蟲だけにしておいては、生れてくる蟲が、小さく弱まつてしまふことであつた。血族結婚が重なるからである。それをさけるために、鈴蟲の同好者たちは、雄を交換する習はしがある。

今は春で、鈴蟲の秋ではないけれども、もみぢの幹の上のくぼみに、今年も咲いたすみれの花から、千重子が壺のなかの鈴蟲を思ひ出したのは、つながりのないことでなかつた。

鈴蟲は千重子が壺に入れたのだが、すみれはどうしてこんな狭苦しいところに來たのだらう。すみれは花咲き、鈴蟲は今年も生れて鳴くだらう。

「自然の生命……？」

千重子は春のそよ風になぶられる髪を、片耳にかきあげた。すみれや鈴蟲に思ひくらべて、「自分は……？」

自然の生命のいつせいにふくらむ春の日のなかに、このささやかなすみれを見てゐるのは、千重子だけであつた。

店の方から晝飯に立つらしい、けはひが聞えた。

千重子も約束の花見にゆく、身じまひの時が近づいてゐた。

きのふ、水木眞一が千重子に電話をかけてきて、平安神宮の櫻見に誘つたのだつた。眞一の友だちの學生が、神苑の入り口で、半月ほど、入苑券しらべに働いてゐる、その學生から、今が花のさかりと、眞一は聞いたと言ふ。

「見張りをつけといたやうなもので、これほど、たしかなことはないやろ。」と眞一は低く笑つた。眞一の低い笑ひはきれいである。

「その人に、うちらも見張られるの？」と千重子は言つた。

「そいつは門番やないか。だれでも通しよる門番や。」と、眞一はまた短く笑つた。「でも、千重子さんがいややつたら、別にはいつて、お庭のなかの花の下で會へばいい。ひとりでいくら見てゐたかて、

見あきるといふ花やないもの。」

「そんなら、おひとりでお花を見といやしたら、よろしおすやんか。」

「いいけど、今晚大雨が降つて、散つてしまつても、ぼくは知らんで。」

「落花の風情を見ますもん。」

「雨にたたかれて落ちよくれた花が、落花の風情なの？ 落花といふのはね……。」

「いけずやわ。」

「どつちが……？」

千重子は目立たぬきものをえらんで、うちを出た。

平安神宮は「時代祭」でも知られてゐるが、今の京に千年あまり前、都をさだめられた、桓武天皇を慕つて、明治二十八年（一八九五年）に建てたのだから、社殿はさう古くはない。しかし、神門と外拜殿は、平安京の應天門と大極殿を模したといふ。右近のたちばな左近の櫻などもある。都が東京にうつる前の孝明天皇も、昭和十三年に合せまつた。神前結婚が多い。

みごとなのは神苑をいろいろ、紅しだれ櫻の群れである。今は「まことに、ここの花をおいて、京洛の春を代表するものはないと言つてよい。」

千重子は神苑の入り口をはいるなり、咲き満ちた紅しだれ櫻の花の色が、胸の底にまで咲き満ちて、「ああ、今年も京の春に會つた。」と、立ちつくしてながめた。

しかし、眞一がどこに待つてゐるのか、まだ來てゐないのか、千重子は眞一をさがしてから、花を見ようと思つた。花の木のあひだをおりた。

その下の芝生に、眞一は寝ころんでゐた。手の指を首筋の下に組んで、目をつぶつてゐた。